『三國志演義』の成立と展開について

――嘉靖本と葉逢春本を手がかりに――

小松　謙
京都府立大學

『三國志演義』のテキストに關する研究は、この二十年間にめざましい發展をとげたといってよい。かつては嘉靖本・毛本以外のテキストについてはほとんど關心が拂われない狀況にあったものが、今では數多くの版本に對して綿密な調査がなされ、中川諭氏の大著『『三國志演義』版本の研究』（汲古書院　一九九八）を初めとする多くの業績が出現するに至っている。

ただ、それらの研究の多くは、各版本の系統付けを行うことを目的としたものである。精密な系統付けからは、『三國志演義』の名をもって總稱される一連の作品群がどのように展開し、變化していったかを見て取ることはできる。しかし、そこに描き出されるのは『三國志演義』がどのように變貌したかという經過であり、『三國志演義』がそもそもどのようにして誕生したのかを明らかにすることができるものではない。[1] もとより、現存するテキストが明代後期のもののみである以上、『三國志演義』の原初形態や成立過程を明らかにすること自體、根本的に不可能な作業であるように見える。しかし、本當に何一つ手段はないのであろうか。原初形態を完全には復元しえないことは確かである。だが、現存するテキストに分析を加えることにより、その成立過程をある程度まで明らかにすることは、必ずしも不可能ではないのではないか。

その鍵となりうる可能性を祕めているのが、性格を異にする二系統のテキストの存在である。『水滸傳』などと同様、『三國志演義』にも繁本と簡本が存在することはいうまでもないが、ここでいう二系統とはその區分ではなく、いわゆる繁本の中に見られる二つの異なった系統を指す。中川氏の區分に從えば、「二十四卷系諸本」と「二十卷繁本系諸本」である。

中川氏をはじめとする從來の研究においては、建陽で刊行された「二十卷系」は、花關索説話を持つテキストとして「花關索系」「關索系」と分類されてきた。しかし、その後内容を確認された葉逢春本は、花關索説話を持たないにもかかわらず、この系統と共通する本文を持つ。そしてその本文は、嘉靖本・吳觀明本などの「二十四卷系」とは大幅に異なるのである。この事實と、葉逢春本の刊行年代が早いことを考え合わせれば、葉逢春本はいわゆる「花關索系」諸本が底本として使用したテキストと同系統の本文を持つ可能性が高いものであることになり、「花關索系」という分類にどこまで有效性があるかにも疑問が生じてくる。問題は、花關索説話の有無ではなく、本文の相違なのである。[2] そして、兩系統の間の本文の相違は、繁本と簡本の間に見られるような、一方が他方を簡略化したといったものではない。兩者の繁簡は定まらず、どちらがより詳細な敍述を行って長い本文を持つかは、部位により大きく異なる。また敍述の詳細さには大差がなくても、言い回しが全く異なる事例も多い。つまり、語られている内容には大きな差がないにもかかわらず、兩系統は大きく異なる本文を持つのである。部分によってはその差は、兩者の間に同じ作品の異本として系統付けを行うことを困難と感じさせるレベルにまで達している。

では兩者はどのような關係にあるのか。一方が他方を省略したというようなものではなく、しかも内容はほぼ同一であり、部位によってはほぼ同じ本文を持ち、同じような題名を持つ以上、兩者はともに完成型であり、そして一方が他方を改作した可能性が高いであろう。もしこの推定が正しければ、兩者の違いのありようから、『三國志演義』の成立過程をある程度再現することが可能になるのではないか。

その場合、多様なテキストを扱うことは、さまざまな違いに目を奪われて問題の本質を見落とす結果をもたらす恐れがある。そこで本論においては、兩系統の現存最古のテキストと思われる嘉靖本と葉逢春本[3]に對象をしぼり、他のテキストについては必要に應じて言及することにしたい。

一

まず、二つのテキストの性格について確認しておこう。

嘉靖本は、巻頭に庸愚子（末尾に付されている印形によれば名は蔣大器）による弘治甲寅、つまり弘治七年（一四九四）の日付のある「三國志通俗演義序」と、修髯子（印形によれば名は張尚德）による嘉靖壬午、つまり嘉靖元年（一五二二）の日付のある「三國志通俗演義引」が置かれている。このことから、その刊行年代は嘉靖元年であると一般に考えられてきた。更に、前者に「書成、士君子之好事者、爭相謄錄以便觀覽（書物が出來上がると、容易に讀めるように物好きな人たちが爭って寫し取った）」とあり、後者に「客」の言葉として「簡帙浩瀚、善本甚艱、請壽諸梓、公之四方可乎（分量が多く、善本も得難いのだから、印刷に付して各方面に公開してもらえまいか）」とあるところから、『三國志演義』は元來抄本で流通していたというのが通説となってきた。④

しかしこのような言い回しは、商業出版物の序に見られる定型表現といってよい。たとえば『西漢演義』に付された甄偉の序にいう。

書成、識者爭相傳錄、不便觀覽、先輩乃命工鋟梓、以與四方好事者共之、請予小敍以冠卷首、遂援筆書此。

この書物が完成すると、識者は爭って寫し取ったが、眼にすることが容易ではなかったので、目上の方が刻工に命じて刊刻させ、各地の物好きな人々とともに樂しむことができるようにして、私に卷頭に序を書くよう依頼されたので、筆を執って書く次第である。

このように、從來眼にすることが困難であったものを、世間の要求に應えるため出版に付すと稱する例は、書坊の出版物には多く、世間の要望があった作品をこのたび完成させ、有名人の批評または校正を付して刊行するというパターンと大差ないものと思われる。もとよりこれらは賣れ行き向上のために書坊が付した廣告の一種と考えるべきものであり、どこまで實態を反映しているかは疑問であるといわざるをえない。

そもそも『三國志演義』は何のために制作されたのであ

ろうか。現存最古の二つの版本の題名を見てみよう。嘉靖本は『三國志通俗演義』、葉逢春本は第一卷冒頭の題名に從えば『新刊通俗演義三國志史傳』、兩者に共通するのは「通俗演義」という語である。「通俗」とは教養のない人間にもわかるということ、「演義」とは內容をわかりやすく敷衍しているということを意味する。つまり、ともに「誰でもわかる『三國志』」という題名であることになる。これは、この書物が教養の高くない人間にでもわかるように書かれた歷史書として作られたことを意味するものであろう。

さて、そのような書物が、しかも『三國志演義』のように大部なものが、抄本の形で流通することなどありうるであろうか。確かに中國の小說の中には、當初抄本の形で讀まれていたことがわかっているものが幾つも存在する。『金瓶梅』『紅樓夢』『聊齋志異』いずれもしかりといってよい。しかし、『金瓶梅』はそもそも地下で流通してしかるべき書であり、しかも判明している範圍では、その抄本を所有していたのはみな高級知識人や政府高官であった。[5]『紅樓夢』も、元來は曹氏一族の間で回し讀みされていたものであり、その後も上流階級の間で抄本が廣がったものと思われる。『聊齋志異』に至っては、元來王漁洋を初めとする山東の知識人の間で抄本が回し讀みされることによって成立したものであり、典故を多く踏まえた文言によって記されていることも、その成立事情の反映と思われる。そして、これらの小說が知識人の間で珍重されたのは、その作者が知識人であり、知識人にもアピールしうる內容を持っていたことに由來しよう。つまり、これらの成立當初は抄本の形で流通していたことを確認しうる小說は、いずれも知識人の間で、知識人的興味のもとに抄寫され、廣まったものなのである。

ところが『三國志演義』は、題名にうたう如く教養書的性格を持ち、實際、他の同種の書よりははるかにまとまっているにせよ、歷史的知識を誇る知識人が興味を抱くようなものとは思えない。他方、明代中期の葉盛の『水東日記』には、一般庶民が繪入りの物語を抄寫して讀んでいたことが見えるが、[6]それはいずれも規模の小さいパンフレッ

ト的なものだったのではないかと推定される。もとより『三國志演義』のような大部の書物を抄寫する經濟的・時間的餘裕は、庶民にはなかったであろう。このような書物の抄本を作成しうるのは、寫字生を雇えるような經濟的餘裕のある人間であるに違いない。

つまり、『三國志演義』が抄本の形で流通していたとは、狀況的に考えがたいのである。そして、常識的に考えて、このような書物は營利目的で制作されるのが普通であろう。營利目的で制作された書物が抄本の形で流布するのも考えにくいことである。

以上の事實を總合すれば、『三國志演義』が當初抄本で流通していたという嘉靖本庸愚子序に見える記述に信を置きがたいことは明らかであろう。その實態は、おそらくは商品價値を高く見せようという書坊の宣傳文句に過ぎないのではないかと思われる。

しかし、ここでもう一つの問題が生じる。嘉靖本は官刻本ではないかといわれているのである。實際、版刻の美しさ、版型の大きさ、外見が立派な割に校勘ミスが多いことなど、嘉靖本は明代官刻本の特徴をもらさず具備しているといってよい。そして、明代官刻本の目錄である『古今書刻』には、都察院が『三國志演義』を刊行している旨の記述があり、また劉若愚の『酌中志』「內板經書紀略」に『三國志通俗演義』の册數・版木の枚數が記錄されている點からして、內府の刊本も存在したものと思われる。嘉靖本がこのいずれかに當たるのではないかという推測は以前からなされてきた。[7] とすれば、その序に書坊の宣傳文句が記されているのは不自然ではなかろうか。

しかし、內府や都察院で刊行されるテキストが內府や都察院で制作されるとは限らない。むしろ何らかの底本があって、それを翻刻する形で刊に付されるのが普通であろう。從って、嘉靖本に書坊のものとおぼしき序文が付されているとすれば、それは官刻本の底本になったテキストが書坊により刊行された營利出版物であったことを意味しよう。實際、內府や都察院で刊行するにあたり、「先輩」がこの書を刊行して流布させるなどという序が付くはずはないのである。とすれば、序の日付である嘉靖元年も、底本

となった書坊刊本の刊行時期を示すものにすぎず、現存する嘉靖本は遅れて刊行されたものであることになる。

一方、葉逢春本の方は、商業出版の總本家ともいうべき建陽で刊行されていることからも察せられるように、明らかに營利目的で刊行されたものである。そのことを何より雄辯に物語っているのは、その題名である。特に目錄に付された「新刊按鑑漢譜三國志志傳繪象足本大全」は、宣傳文句の滿艦飾といってよいであろう。その意味するところは、「新刊」つまり新たに刊行された、「按鑑」つまり『資治通鑑』に依據する、「繪像」つまり插繪入りの、「足本」つまり缺落のないテキストということであり、最後の「大全」に至っては餘分な文句としかいいようがない。更に「漢譜」という語も冠されており、これが何を意味するかについては議論があるが、[8] 要するにもっともらしい體裁をこしらえるために付けられた語であることは間違いあるまい。

しかもその本文は、いわゆる上圖下文形式を取っている。これが建陽本の特徴であり、教養レベルが高くない人々、場合によっては非識字層をも讀者として想定したものであることはいうまでもない。そして各巻の初めには、たとえば巻之一に「起（漢靈帝）中平元年甲子歳　止（漢獻帝）興平二年乙亥歳　首尾共一十二年事實」とあるように、そこで扱われている事件の年代を明示する記述がある。これは、先にふれた「按鑑」という宣傳文句とあわせて、この書が歴史書であることをアピールするための形式ということになろう。ただし、「按鑑」、つまり自身を『通鑑』と見なすのではなく、『通鑑』に基づいていると稱していることにすでに示されているように、決して正統的史書であると自己主張しているわけではなく、正統的史書の記述を踏まえて分かりやすく書き直した歴史書、つまりは大量の插繪を持つ非知識人向けの教養的歴史書という形で賣ることを意圖した形式を取っているのである。

これは、先に想定した『三國志演義』の制作動機と合致する。そして、『三國志演義』の原型が、もし歴史上の羅貫中が生存していた元末明初期に成立したものであるとすれば、その當時商業的意圖のもとにこうした大部な書物を制作しようと考える可能性が最も高いのは、營利出版の先

進地域であった建陽の書坊であろう。とすれば、早い時期に建陽で刊行された葉逢春本は、建陽で傳承されていた『三國志演義』の原型に近い姿を留めている可能性が高いことになる。事實、その後建陽地區で刊行される余象斗本以下の諸本は、黄正甫本のようないわゆる簡本をも含めて、葉逢春本と同系統の本文を持つテキストが主流を占めるのである。[9]

しかし、預斷は禁物であろう。兩テキストの關係を探るためには、まず虚心に本文を檢討しなければならない。

二

まず考えておかねばならないのは、異同というもののありようである。たとえば、嘉靖本系統のテキストと毛本の場合、後者が前者（おそらくは李卓吾評本のいずれか[10]）に依據し、それに基づいて改變を加えたことは確實といってよい。また、同一系統に屬する簡本と繁本の場合、前者が後者を簡略化したものであることもまた明らかに見て取れる。これらはいずれも單純な關係であって、本文を丹念に檢討すれば兩者の關係を容易に明らかにすることができるばかりか、各系統の中のどのテキストが原據であるかまでを解明することも決して困難ではない。

しかし、嘉靖本と葉逢春本の關係は、これらとは全く様相を異にする。兩者は分量において大差ない。つまり、簡本と繁本のように一方が他方を簡略化したという關係にあるとは考えられない。しかもその繁簡のありようは一定せず、部分によっては同一内容を敍述するに當たって、ある箇所では嘉靖本の方が文が長いかと思えば、別の箇所では葉逢春本の方が文が長いといった具合であり、しかもしばしば文章の敍述のパターン自體が異なっている。これは、一方が他方に依據したという性格のものではなく、同じ題材について別個に書かれた文章と見た方が正確であろう。しかし、全篇通じてこうしたことがいえるというわけでもなく、部分によっては異同が非常に少ない。つまり、嘉靖本と葉逢春本の異同のありようはまだらともいうべきものであり、異同が多い部分の内部においてもまた、まだらともいうべき繁簡の違いが認められるのである。

具體的事例に卽して見てみよう。嘉靖本卷十六「漢中王怒殺劉封」（以下部位はすべて嘉靖本に從って示す）の一節、右が嘉靖本、左が葉逢春本である。

（嘉）遂扯了書、　斬其使、　次日引軍前來搦戰。孟
（葉）遂扯碎其書、斬訖來使、　次日引軍前進。　孟

達知得扯書斬使、勃然大怒、亦領軍出迎。兩陣對圓、
達知碎書斬使、　亦引軍來。　兩陣對圓、

封立馬於門旗下、　以刀指達而罵曰、背國反賊、
劉封孟達皆出馬於陣前、劉封大罵、　孟達反賊、

安敢陣前使閒諜之計也。孟達亦罵曰、汝死已
爭雪吾恨、　敢　使閒諜　計。　孟達　曰、汝死已

臨頭上、　自執迷不省、與禽獸何異耶。　封大怒、拍馬
臨頭、　尙自愚迷不省、　禽獸何別。　劉封大怒、拍馬

輪刀、直奔孟達。
舞刀、直取孟達。

わずかこれだけの中からも、先に述べた繁簡が一定しないという狀況を明らかに見出しうる。字數でいえば、嘉靖本98字に對して葉逢春本89字と、嘉靖本の方が長いように思われる。しかし、初めの二つのセンテンスだけを比較すれば、嘉靖本7字に對し葉逢春本は9字と逆轉することになる。つまり、一つの事柄を敍述するためにどちらがより多くの字數を要しているかは一定していないことになる。しかも、敍述されている事柄自體はほとんど同一である。この事例からも、この二つのテキストの異同のありようが特異なものであることが見て取れよう。

では、兩者はどのような關係にあるのか。これは容易に解決しうる問題ではないが、絲口となる要素がないわけではない。兩者の文體の相違である。嘉靖本が「扯了書、斬其使」と三音節二句で「手紙を引き裂くと、使者を斬って」と始まるのに對し、葉逢春本は「扯碎其書、斬訖來

使」と四音節二句で「手紙を引きちぎり、やって來た使者を斬ってしまうと」となる。葉逢春本の方には「碎」「訖」という無用の語が付いていることになるが、これは中國語で最も安定した單位である四音節を形成し、あわせて對句調にしようとする意識のあらわれであろう。以下も四字句が多いことは一見して明らかである。おそらくはそのために、「愚迷不省、禽獸何別」という意味を取りにくい言い回しが出てくることになる。同じ部分が嘉靖本では「執迷不省、與禽獸何異耶」となっており、意味ははるかに明快になっている。これらの事實は何を意味するものであろうか。

二つのテキストは、文面を異にするものの、內容的にはセンテンスの單位に至るまでほとんど合致する以上、無關係とは到底思えない、では兩者はどのような關係にあるのか。考えられる可能性は二つある。卽ち、葉逢春本が嘉靖本のような文面を簡略化し、四字單位に改めた結果、分かりにくくなってしまったのか、あるいは葉逢春本のような生硬な本文をより分かりやすいように書き換えた結果、嘉靖本の本文が成立したかである。前者は繁本から簡本が作られる際に發生しやすい事態であり、一見正しいように思われる。しかし細かいところまでよく見ると、そのようなことはありえないことが明らかになる。

まず先に引いた嘉靖本の「執迷不省、與禽獸何異耶」という一文だが、その前に「自」という語が付いていることに注意されたい。これを「一人で、勝手に」という意味の副詞ととって、「死が迫っているのに、ひとりで目覺めもせず」と解釋することも不可能ではないが、葉逢春本では「尙自愚迷不省」となっていることと考え合わせると、おそらく事情は異なるものと思われる。「尙自」の「自」は副詞を二音節化するためにつく接尾語であり、これ自體意味を持たない。そして、葉逢春本の本文に從えば、「死が迫っているのに、それでも目覺めず」と、はるかにスムーズに理解することが可能になる。これは、「尙自」という本文をもとに粗雜な省略を加えた結果生じた現象である可能性が高かろう。

これだけでは決定的な證左とはいえないが、更に興味深

いのはその前の部分である。嘉靖本には「安敢陣前使間諜之計也」、つまり「陣に臨んで反間の計を使うとはいい度胸だ」となるが、孟達が反間の計を用いたのは劉封に手紙を送って劉備に背くよう誘った時のことであり、「陣前」というのはおかしい。ここは、葉逢春本の「敢使間諜計（反間の計を使うとはいい度胸だ）」の方が、舌足らずではあるものの自然であろう。これは、葉逢春本のような舌足らずな言い方を正そうとして、かえって不自然な表現に陥ってしまったものと考えると理解しやすい。

更に、嘉靖本では劉封の名が二度目に出る時には「封」と略されるのに對し、葉逢春本では「劉封」と常にフルネームで呼ばれ、しかも「劉封孟達皆出馬於陣前、劉封大罵、孟達反賊」とくどいほどに人名が反復される上に、嘉靖本のように「曰」が付されていないため、どこからがセリフなのか分かりにくい。實際、右の引用は「劉封大罵孟達、反賊」と讀むことも可能である。これらは、葉逢春本が書記言語として十分には洗練されていないことのあらわれといってよかろう。そして、何より重要なのは、嘉靖本と同様の本文を持つテキストをもとに葉逢春本ができたのであれば、このような事態は絶對に發生するはずがないことである。實際、簡略化を圖っているテキストが、不必要に人名を增やし、「封」と書いて十分意味が通じているものに更に姓を加えるはずがない。

以上の諸點から考えると、葉逢春本がより古い形態を持ち、その不完全な文章を書記言語としてより自然なものへと書き直した結果成立したのが嘉靖本であるように思われる。

では他の部分についても同樣のことがいえるであろうか。もう一箇所、卷十五「趙子龍漢水大戰」の一節をあげてみよう。

（嘉）二人約定、　各回營中。　子龍與部將張翼曰、今
（葉）二人約定了、子龍自回寨、　和副將張翼曰、今

黃漢升　約定明日去奪糧草。若午時不回、　我去救
黃漢身ママ約定明日去劫粮。　如日當早ママ午不回、交我接

應。吾營前臨漢水、地勢危險、我若去時、　汝可應。吾當前臨漢水、地甚險惡、恐吾去接應黃忠時、汝可謹守寨柵、不可輕動。張翼聲諾。

緊守寨柵、不得輕動。張翼與子龍約會了。

ここでは若干ではあるが、葉逢春本の方が本文が長い。この點からも、繁簡不定の傾向を確認することができよう。異同の度合いは前に引いたくだりより少ないように見えるが、やはり特徴的な違いが認められる。まず、嘉靖本の「地勢危險」と葉逢春本の「地甚險惡」は、意味的には大差なく、どちらでもいいようなものだが、嘉靖本が主語・述語ともに二音節という安定した構造であるのに對し、葉逢春本は一音節の主語に、一音節の修飾語を伴った二音節の述語が續く形を取っている。特に主語が單音節語であることは、何か舌足らずな印象をもたらす。また葉逢春本がその前で「如日當早（「卓」の誤りであろう）午不回、交我接應」といい、後では「恐吾去接應黃忠時」というのは、「接應」という語が重複する點で無駄が多い。しかも前者で「日當卓午（お晝時）」という言い回しを用い、「交我接應（私に救援させる）」と使役形で述べるのは、おそらくかなり口語的な表現であり、嘉靖本の「午時」「我去救應」の方がはるかに簡潔で分かりやすい。また後者も「恐」を受ける語が存在せず、舌足らずな言い方になっている。更に注意されるのは、ここで使役の語として「交」が使用されていることである。「交」「教」「叫」はいずれも使役の語「jiao」を表記するために使用される字であるが、「教」が文言・白話を問わず古來用いられてきたのに對し、『元刊雜劇三十種』『全相平話』などの元代の白話文學刊本では「交」が用いられる傾向にある。しかし明代後期の刊本では「教」が主流となり、更に「叫」も用いられるようになる一方、「交」の用例數は激減する傾向にある。[11] つまり葉逢春本は、明代後期のテキストとしては非常に古めかしい表記を用いていることになる。

更に興味深いのは、引用部末尾の一語である。嘉靖本が「張翼聲諾（張翼は承知しました）」という常識的な一句で

終わるのに對し、葉逢春本では「張翼與子龍約會了（張翼は子龍と約束しました）」という、趙雲の命令を承けたものとしては不自然な一文がくる。こうした、前のセリフを承けるにもかかわらず、一度斷絶するような言い回しは、「全相平話」には頻出するものである。『武王伐紂平話』卷下の例をあげよう。「費仲氣喘難言、良久具說前事、『……』、費仲囑罷、他去見帝去了（費仲は息を切らしてものも言えませんでしたが、ずいぶんたってからこれまでのことを詳しく話して、「……（ここで戰うなという費仲の命令が述べられる）」、費仲は言いつけると、彼は帝に會いに行きました）」。これがいわば古風な、洗練されない敍述の仕方であることは明らかに見て取れよう。

つまり、ここでも全體に葉逢春本が舌足らずであるのに對して、嘉靖本ははるかに洗練された文體を持っていることになる。單に字數だけから見ても、葉逢春本が嘉靖本を省略したものとは思えない以上、嘉靖本を葉逢春本のように改作することはまず考えられないであろう。更に、すでに指摘されているように、しばしば嘉靖本では誤っているものが葉逢春本では正しいという事例が認められる。[12] これも、嘉靖本が原據であれば生じえない事態であろう。

では、嘉靖本は葉逢春本に基づいて改作されたのか。これもまたありえないことである。そもそも葉逢春本は脫落が非常に多いテキストであり、嘉靖本に本文が存在する部分の多くが葉逢春本には缺けている。しかもその脫落の原因は、ほとんどの場合が比較的近接して二度現れる單語の間を飛ばしてしまうという、版下書きの段階で不注意ゆえに生じるものである。[13] ということは、葉逢春本は、葉逢春本とほぼ同じ本文を持つが、內容的には缺落のない（換言すれば內容面では嘉靖本に近い）テキストに依據していることになる。そのテキストがいつどこで成立したものかは分からない。ただ、葉逢春本には脫落が多い以上、原テキストと一部なりとも同版であることや、原テキストの覆刻である可能性はないといってよかろう。

以上見てきた傾向は、ある程度は嘉靖本と葉逢春本全體に認められるものである。ただ、先にも述べたように兩者の異同のありようには濃淡が認められる。部分によっては

差が非常に少ないのに對し、ほとんど校勘不能なまでに違う部分も存在するのである。まず差が少ない方の事例をあげてみよう。卷一「劉玄德斬寇立功」のはじめの部分である。

（嘉）　玄德部領五百餘衆、飛奔前來。直至大興山下、
（葉）　劉玄德部領五百餘衆、飛奔前來。　至大興山下、

與賊相見。各將陣勢擺開、玄德出馬。左有關某、右有張
與賊相見。各將陣勢擺開、玄德出馬。左有關羽、右有張

飛、……遣副將鄧茂、挺鎗直出、張飛睜環眼、　挺丈八
飛、……遣副將鄧茂、挺鎗直出、張飛睜圓環眼、挺丈八

矛、手起處刺中心窩、鄧茂翻身落馬。後有人讚益德曰、
矛、手起鎗落、刺中心窩、鄧茂落馬。

欲敎勇鎭三分國、先試衝鋼丈八矛。
欲敎勇振三分國、先試衝鋼丈八矛。

兩者の差は誤差範圍といってよいレベルにとどまる。ただここで注意されるのは、葉逢春本では「玄德」の前に無用とも思える「劉」があること、葉逢春本が「睜圓環眼、挺丈八矛、手起鎗落」と四字句を連ねるのに對して、嘉靖本は「睜環眼、挺丈八矛、手起處」となっていることである。前者は、葉逢春本の不必要にフルネームを使用しようとする傾向のあらわれであり、後者は、葉逢春本が四字句を用いようとするのに對し、嘉靖本は必ずしも拘泥しないことを示す事例であろう。そして、葉逢春本の「睜圓環眼、挺丈八矛」は、ともに四字句とはいえ、前の句が2—2、後の句が1—3と構造を異にするのに對し、嘉靖本は三字句と四字句ではあるが、兩者ともに一音節の動詞が目的語を取るという點で、リズムがむしろ自然であることは注意される。

もう一つ問題となるのは最後の七言二句である。このように戰鬪の後に韻文を插入する例は「全相平話」に多く見られる。そして、葉逢春本のように斷りなく突然詩を插入

するのは「全相平話」のパターンに合致するといってよい。一方、嘉靖本は「後有人讚益德曰」と、唐突さをあまり感じさせない敍述法を用いている。ここでも葉逢春本の方が古い形態を殘していると見てよかろう。そして、『三國志演義』全體の中ではこのように戰鬪の後に突然韻文を插入する事例があまり見られなくなっていくことを考えれば、體裁を整えているとはいえ、嘉靖本の中にこの句が殘っていることは、嘉靖本が古い形態のテキストを改編したものであることの傍證といえるかもしれない。

以上のように、異同が非常に少ない場合でも、葉逢春本の方が全體に古めかしいスタイルを殘しているのが一般的である。一方、ほとんど本文が別物といってよいケースも存在する。卷十九「孔明大破鐵車兵」の一節をあげてみよう。

（嘉）雅丹丞相早被馬岱活捉、解到大寨來。番兵各自逃去。孔明升帳、馬岱押過雅丹來。孔明叱武士去其縛、賜酒食壓驚、用好言撫慰。孔明喚雅丹丞相曰、吾主乃大漢皇帝、命吾討賊。　尔如何聽反臣之語而作亂也。吾國與尔乃隣邦、永結盟好。勿聽反言。　尔若從之、將舊日爲隣邦、　永結盟好。休聽反臣之言。　將舊日通好之意傷壞矣。通和之意壞了。

（葉）馬岱先捉了雅丹、　餘軍各自逃散。丞相孔明將雅丹放免、供待酒食、　用好言撫慰　曰、我等是大漢皇帝根脚奉詔討賊。若平了反臣之後、　與汝國通好之意傷壞矣。

文面は全く異なるといっても過言ではない。人名を別にすれば、「各自」「酒食」「反臣」といった單語が共通する程度で、單語單位を超えて一致する部分は「用好言撫慰」

「永結盟好」ぐらいしかない。しかし、語られている内容にはほとんど差がないのである。従って、いかに文面が違おうと、両者が無關係とは考えられない。では、いったいどういう關係にあるのか。分量からいえば、この場合は明らかに葉逢春本の方が少ない。とすれば、もし両者に直接的關係があるとすれば、この場合は嘉靖本を削ったものが葉逢春本であるか、あるいは葉逢春本に增補を加えたものが嘉靖本であるかのいずれかになる。そのいずれも考えうるように思われるが、ただ氣になるのは葉逢春本の方が分量が多い箇所も存在することである。孔明の言葉の最初の部分は、葉逢春本の「我等是大漢皇帝根脚奉詔討賊（我々は大漢皇帝配下にて、詔奉じて賊を討つもの）」が、嘉靖本では「吾主乃大漢皇帝、命吾討賊（わが主人は大漢皇帝にて、わしに命じて賊を討たせられた）」となっている。「根脚」は通常「もと」、轉じて「出身」といった意味で用いられるが、ここでは、たとえば「三奪槊」雜劇（元刊本）第一折に「爭奈秦王根底有尉遲」と見えるような、「～のもとで」という「根（跟）底（地）」と同じ用法であるように思われる。「根脚」のこうした用法は他にあまり例を見ないものであり、あるいは「根底」の誤りかとも思われるが、いずれにせよ非常に口語的な語彙であることは間違いあるまい。しかも、「～根底」という言い方が元代白話文において特徵的に見られるものであることは周知の通りであり、[14]明代に入るとこの種の言い回しの用例數は激減する。

つまり、ここでも葉逢春本はより古めかしい口語的な言い回しを用いているのである。もし嘉靖本のような文面を削ったものであれば、このような單語が付加されるとは思えない。とすれば、嘉靖本は葉逢春本のような原文から不要な要素を削った上で、敍述がより詳しくかつ自然になるように變更を加えたものと思われる。

以上述べてきたことから見ると、葉逢春本の方が原型に近く、嘉靖本はその原型に改良を加えた結果成立したテキストであるように思われる。ただ、どのような場合にもこうしたことがいえるわけではない。特に後半、葉逢春本の敍述が極度に簡略になることがある。たとえば卷十九「司馬懿智擒孟達」など、葉逢春本は、簡本であるはずの黄正

甫本よりもむしろ簡略な本文を持つ。この事實は、一部の箇所においては葉逢春本も簡本化している可能性を示唆しよう。葉逢春本が明らかに營利目的で刊行された、かなり脱落の多いテキストであることを考えると、人氣の乏しい部分を簡略化してコストを下げようとする試みがなされた可能性があることは否定できまい。つまり、嘉靖本と葉逢春本はおそらくほぼ同様の祖本から出ており、嘉靖本が全面的に改編を加えたものであるのに對し、葉逢春本は祖本の文面をかなり忠實に傳えてはいるものの、あちこちで脱落を起こしたり、省略を施したりしているというのが實態に近いのではなかろうか。そして余象斗本なども葉逢春本に近い本文を持つということは、明代末期に至るまで建陽では原本に近い本文が傳承されてきたということになろう。

このように考えてくると、まことに興味深い問題が浮上してくる。前にも述べたように、嘉靖本と葉逢春本の間に認められる異同のレベルは、部位によって大きく異なる。ここまで考えてきたことが正しいとすれば、それは改作が施されたレベルの差を反映していることになるのではないか。もとより、葉逢春本に「簡本化」が加えられた部分があるとすれば、そこにはこの原則はあてはまらないことにはなるが、そのような箇所は例外的といってよい。改作のレベルに差があることは何を意味するのか。それは、成立事情や成立時期の相違を反映しているのではないか。とすれば、そこから『三國志演義』の成立過程をある程度うかがうことが可能になるかもしれない。次節でこの問題について細かく檢討してみることにしよう。

三

異同の濃淡は、具體的にどのように分布しているのか。この點について調査した結果が次の表である。この調査に當たっては、周文業氏が開發された「三國演義電子資料庫」CD―ROM（北京國學時代文化傳播有限公司）の「文本對比」機能を利用させていただいたことをまずお斷りしておく。則の區分と名稱は嘉靖本のものを使用し、それぞれの則の異同の程度を三段階に區分した。○は異同が微細なレベルにとどまり、本文については大差ないもの、△は

則數・内容	異同	特徴	違う部分	相似程度	備考
1 祭天地桃園結義	○	始めのみ嘉詳しい		72.52	
2 劉玄德斬寇立功	○	ほとんど同じ			
3 安喜張飛鞭督郵	○	ほとんど同じ		83.03	
4 何進謀殺十常侍	○	ほとんど同じ			
5 董卓議立陳留王	○	嘉は李儒を董卓の女婿とする		82.11	
6 呂布刺殺丁建陽	○	ほとんど同じ			
7 廢漢君董卓弄權	○	ほとんど同じ		81.02	
8 曹孟德謀殺董卓	○	ほとんど同じ			
9 曹操起兵伐董卓	○	盟約の文のみ異同多い		77.28	
10虎牢關三戰呂布	○	三戰のところで多少出入りあり。繁簡は不定			
11董卓火燒長樂宮	○	ほとんど同じ		81.03	
12袁紹孫堅奪玉璽	○	玉璽と蘇獻のこと嘉のみ			
13趙子龍磐河大戰	○	戰鬪で一文のみ葉多い		79.05	
14孫堅跨江戰劉表	○	公孫瓚の書簡とその前のみ異同あり			
15司徒王允說貂蟬	○	ほとんど同じ		84.58	
16鳳儀亭布戲貂蟬	○	ほとんど同じ			
17王允授計誅董卓	○	董卓についての評論のみ嘉多い		75.36	
18李傕郭汜寇長安	○	王允についての評論のみ嘉多い			
19李傕郭汜殺樊稠	○	ほとんど同じ		80.1	
20曹操興兵報父仇	○	曹嵩殺し少し差あり			
21劉玄德北海解圍	○	太史慈との會話、葉は間接話法と直接話法が混亂		80.2	
22呂溫侯濮陽大戰	○	ほとんど同じ			
23陶恭祖三讓徐州	○	ほとんど同じ		73.14	
24曹操定陶破呂布	△	荀彧の辯舌嘉長い。他にも細かい異同	李郭		
25李傕郭汜亂長安	△	李郭の戰い、葉は簡單だが靜軒詩あり。かなり異なる	李郭	65.65	
26楊奉董承雙救駕	△	李傕郭汜のこと、やはり嘉のみ詳しい	李郭		
27遷鑾輿曹操秉政	△	李郭のくだりやはり嘉詳しい	李郭	66.97	
28呂布夜月奪徐州	△	戰鬪のくだりで細かい異同	戰鬪・張飛		
29孫策大戰太史慈	○	ほとんど同じだが、孫策と太史慈の戰いのみ差が	戰鬪	70.1	
30孫策大戰嚴白虎	△	戰鬪に差あり	戰鬪		
31呂奉先轅門射戟	△	袁術の書簡嘉詳しい。他も細かい異同。射戟は異同少ない	書簡	60.92	
32曹操興兵擊張繡	○	少しだけ差あり			

33袁術七路下徐州	○	葉に脱落？		70.07	
34曹操會兵擊袁術	○	孫策の書簡に差あり。戰鬪にも少數の差	戰鬪		
35決勝負賈詡談兵	△	大筋は同じだが微妙に言い回しが異なる		71.18	
36夏侯惇拔矢啖睛	○	ほとんど同じ			
37呂布敗走下邳城	○	戰鬪の關張のみ微妙に異なる		71.71	
38白門曹操斬呂布	○	少しだけセリフに差が			
39曹孟德許田射鹿	○	許田について劉備の說明、嘉詳しい		67.98	
40董承密受衣帶詔	○	嘉少し詳しい			
41青梅煮酒論英雄	○	ほとんど同じ		67.23	
42關雲長襲斬車冑	△	斬車冑のくだりのみ差あり			
43曹公分兵拒袁紹	○	ほぼ同じ。葉は鄭玄を鄧玄とする		68.97	
44關張擒劉岱王忠	○	戰鬪少し差あり			
45禰衡裸體罵曹操	△	禰衡の言葉など多少出入りが。繁簡不定		68.04	
46曹孟德三勘吉平	△	拷問のくだり多少異なる。あとは嘉が長め			
47曹操勒死董貴妃	○	嘉が少し多い		65.6	
48玄德匹馬奔冀州	○	ほとんど同じ			
49～72は葉缺			戰鬪		
73劉玄德三顧茅廬	○	ほとんど同じ		70.99	
74玄德風雪訪孔明	○	始めの情景描寫など少し異同あり			
75定三分亮出茅廬	△	始めの三人の問答、桓公のことなど葉詳しい。他は嘉がやや詳しい		66.09	
76孫權跨江破黃祖	△	徐氏復讐のみ嘉が非常に詳しい。他はほぼ同じだが嘉がやや詳しい			
77孔明遺計救劉琦	○	葉に脱文あるほかはほとんど同じ		67.2	葉脱文
78諸葛亮博望燒屯	△	牛尾のこと葉なし。戰鬪、葉に脱文あるほか、多少の差あり			葉脱文
79獻荆州粲說劉琮	△	議論、嘉のみ長い。あとも差あり	議論	55.13	
80諸葛亮火燒新野	△	戰鬪に差あり。また兵數など嘉のみ詳しい。大筋は大差なし	戰鬪		
81劉玄德敗走江陵	○	魏延のくだりのみ小異		67.39	
82長阪坡趙雲救主	○	青虹劍・麋夫人のくだりのみ小異			
83張益德據水斷橋	○	韻文除けば大差なし。葉解說あり		66	
84劉玄德敗走夏口	○	關羽と劉備の許田のことのみ差あり。	議論		
85諸葛亮舌戰群儒	○	ほとんど同じ		74.17	

86諸葛亮智激孫權	○	ほとんど同じ			
87諸葛亮智説周瑜	○	ほとんど同じ		71.48	
88周瑜定計破曹操	○	ほとんど同じ			
89周瑜三江戰曹操	○	葉脱落あり		69.63	葉脱文
90群英會瑜智蔣幹	○	葉脱落あり。細かい違いあり			葉脱文
91諸葛亮計伏周瑜	△	やり取りに細かい異同。霧の説明嘉のみ		62.83	
92黄蓋獻計破曹操	○	打黄蓋のやりとりのみ異同あり			
93闞澤密獻詐降書	○	闞澤と曹操のやりとりのみ異同あり		66.38	
94龐統進獻連環計	○	ほとんど同じ			
95曹孟德横槊賦詩	?	龐統と徐庶のやりとり異同多い。他は葉脱落多く脱葉もあり比較困難		脱葉多し	
96曹操三江調水軍	?	前半は葉脱葉。殘存部分はほとんど同じ		脱葉多し	
97七星壇諸葛祭風	○	ほとんど同じ		80.95	
98周公瑾赤壁鏖兵	○	ほとんど同じ			
99曹操敗走華容道	○	ほとんど同じ		73.9	
100關雲長義釋曹操	○	庾公之斯の話、葉のみ			
101周瑜南郡戰曹仁	○	細かい異同あり		73.19	
102諸葛亮一氣周瑜	△	戰鬪であちこちに異同。葉の方が詳しい	戰鬪		
103諸葛亮傍略四郡	○	戰鬪で少しだけ異同		74.56	
104趙子龍智取桂陽	△	前半戰鬪中心に細かい異同あり。後半はほとんど同じ	戰鬪		
105黄忠魏延獻長沙	△	細かい異同多い		73.95	
106孫仲謀合淝大戰	○	六郡の説明葉のみ			
107周瑜定計取荆州	○	ほとんど同じ		72.79	
108劉玄德娶孫夫人	△	相互に多少繁簡あり			
109錦囊計趙雲救主	△	特に後半の脱出から異同あり		67.63	
110諸葛亮二氣周瑜	×	後半戰鬪大幅に異なる	戰鬪		
111曹操大宴銅雀臺	△	銅雀臺のくだりかなり異なる		67.8	
112諸葛亮三氣周瑜	○	ほとんど同じ			
113諸葛亮大哭周瑜	△	大部分が引用だが、地の文は少し違う		73.92	
114耒陽張飛鷹鳳雛	○	ほぼ同じだが多少繁簡あり。嘉にミスあり			
115馬超興兵取潼關	△	後半曹洪の失策、かなり異なる。龐德の計の説明葉のみ		60.54	
116馬孟起渭橋六戰	△×	曹操の逃走と船のこと、大きく異なる。葉脱落あり	戰鬪		葉脱文

117許褚大戰馬孟起	△	許褚との戰鬪のみ異同。また韓遂のこと、少し異なる	戰鬪	73.75	
118馬孟起步戰五將	△	韓遂のくだりのみ差あり。あとはほとんど同じ	戰鬪		
119張永年反難楊修	○	ほぼ同じだが版木を燒くことは嘉になし		67.27	
120龐統獻策取西川	○	ほぼ同じだが辯舌に小異。葉に脫落あり			葉脫文
121趙雲截江奪幼主	△	蜀の部分はほとんど同じ。趙雲登場以下が大きく異なる	戰鬪	68.88	
122曹操興兵下江南	○	張紘の遺書以外異同少ないが、豚兒・公不死など名文句が異なる			
123玄德斬楊懷高沛	○	ほぼ同じ。葉は後半脫葉		脫葉多し	
124・125は葉缺					
126張益德義釋嚴顏	△	始めの部分は葉脫葉。戰鬪は異同多く、他は少ない	戰鬪	脫葉多し	
127孔明定計捉張任	△	全體に異同多い	戰鬪	70.56	
128楊阜借兵破馬超	○	蜀の部分のみ異同あり			
129葭萌張飛戰馬超	○	ほとんど同じ		74.78	
130劉玄德平定益州	○	ほとんど同じ			
131關雲長單刀赴會	△	會の異同は少ない。諸葛瑾とのやりとり、葉は養老云々などかなり違う		72.82	
132曹操杖殺伏皇后	○	ほとんど同じだが、葉は解說あり			
133曹操漢中破張魯	○	ほとんど同じ		71.85	
134張遼大戰逍遙津	△	戰鬪のみ差あり	戰鬪		
135甘寧百騎劫曹營	×	最後の方のみ差少ないが、あとは文面大幅に異なる	戰鬪	60.67	
136魏王宮左慈擲杯	△	全體に異同多い			
137曹操試神卜管輅	○	一句が異なる以外はほぼ同じ		72.74	
138耿紀韋晃討曹操	△	金禕との會話のみ異同あり。他はほとんど同じ	密談		
139瓦口張飛戰張郃	○	數字など少し違う程度		72.37	
140黃忠嚴顏雙建功	○	數字など少し違う程度			
141黃忠馘斬夏侯淵	△×	戰鬪、大幅に異なる。黃絹幼婦のくだりはあまり差がない	戰鬪	54.3	
142趙子龍漢水大戰	×	大きく異なる	戰鬪		
143劉玄德智取漢中	×	大きく異なるも、末尾の曹彰のくだりは差減る	戰鬪	56.05	
144曹孟德忌殺楊修	×○	最初の戰鬪は差大きいが、楊修のことはほとんど差なし	戰鬪		
145劉備進位漢中王	○	ほとんど同じ		67.77	

146關雲長威震華夏	△	戰鬪少し異なる	戰鬪		
147龐德擡櫬戰關公	×	全體に異同多い	戰鬪	49.97	
148關雲長水渰七軍	×△	戰鬪の終わりまで大きく異なるが、終わると異同激減	戰鬪		
149關雲長刮骨療毒	○△	治療はあいさつ以外は差少ない。吳の作戰になって異同あり		52.6	
150呂子明智取荆州	×	戰鬪中心に大きく異なる	戰鬪		
151關雲長大戰徐晃	×	大きく異なるが、關羽と徐晃のくだりだけ異同が少ない	戰鬪	48.77	
152關雲長夜走麥城	△	差は大きくないが、呂蒙が關羽の使者を利用するところなどは違いあり			
153玉泉山關公顯聖	△	關羽の死、嘉は避ける。他は少し違う程度。吳の話になると異同減少		52.51	
154漢中王痛哭關公	○	關羽の首のこと以外は差少ない			
155曹操殺神醫華陀	○	押獄のことのみ差あり。孫權の手紙、葉は本文略		51.65	書簡省略
156魏太子曹丕秉政	○	始めの部分で少し差があるのみ			
157曹子建七步成章	△	全體に少しずつ差あり		58.38	
158漢中王怒殺劉封	△	手紙以外はかなり異なる	戰鬪		
159廢獻帝曹丕篡漢	○	一部のやり取り以外ほぼ同じ		60.91	
160漢中王成都稱帝	△○	始めの曹丕のこと・奇瑞のことのみ少し差あり			
161范強張達刺張飛	△	張飛殺害の部分と息子たちの登場のみ大きく異なる		50.81	
162劉先主興兵伐吳	△	仙人に問う場面と孫權の對應のみ異なり、他は差少ない			
163吳臣趙咨說曹丕	△	趙咨の辯舌のみほとんど同じ。諸葛瑾のところ、嘉詳しい		48.53	
164關興斬將救張苞	×	大きく異なる（特に前半）	戰鬪		
165劉先主猇亭大戰	×△	戰鬪大きく異なる。交渉などは差減る	戰鬪	49.2	
166陸遜定計破蜀兵	○	ほとんど同じ			
167先主夜走白帝城	○	差少ない（合戰場面に少しあり）		50.88	
168八陣圖石伏陸遜	△○	始めの戰鬪は少し差あり。八陣はほとんど同じ			
169白帝城先主托孤	△	細かい差あり。劉備の遺言前後は差少ない		64.6	
170曹丕五路下西川	○	差少ない			
171難張溫秦宓論天	○	差少ない		61.56	
172泛龍舟魏主伐吳	△	孫韶のくだりと戰鬪のみ差あり	戰鬪		
173孔明興兵征孟獲	△	戰鬪のくだりのみ差あり。他は差少ない		47.87	

174諸葛亮一擒孟獲	×	はじめは近いがあとは大きく異なる。葉後半は原文脱落か			葉脱文？
175諸葛亮二擒孟獲	○	差少ない		40.88	
176諸葛亮三擒孟獲	？	葉脱落もしくは極端な簡略化			葉脱文？
177諸葛亮四擒孟獲	×	朶思大王の登場を除き、大きく異なる		53.64	
178諸葛亮五擒孟獲	△	差はあまり多くないが、孟節のくだりや戰鬪など少し異なる			
179諸葛亮六擒孟獲	△×	場所によって差あり、祝融夫人のくだりなどは大きく異なる		44.63	
180諸葛亮七擒孟獲	×○	戰鬪大きく異なる。戰いが終わると急に差がなくなる			
181孔明秋夜祭瀘水	○	差少ない（一部文が前後している）		58.39	
182孔明初上出師表	○	差少ない（そもそも引用が多い）			
183趙子龍大破魏兵	△	趙雲の戰鬪の部分のみ差が大きい	戰鬪	50.27	
184諸葛亮智取三郡	×	差大きい。ただし部位により違いあり	戰鬪		
185孔明以智伏姜維	×	差大きいが、戰鬪以外は近くなる	戰鬪	52.48	
186孔明祁山破曹眞	○	最後の戰鬪のみ少し差あり			
187孔明大破鐵車兵	×	大きく異なるが濃淡あり。繁簡不定	戰鬪	39.52	
188司馬懿智擒孟達	×	葉簡潔。原據の簡本化か			葉簡本？
189司馬懿智取街亭	△	葉一葉（街亭の導入）缺。孟達は差多いが、街亭では減る。葉やや簡略		34.35	葉簡本？
190孔明智退司馬懿	○	差は少ないが、葉簡略			葉簡本？
191孔明揮淚斬馬謖	○	葉簡略		40.56	葉簡本？
192陸遜石亭破曹休	△	葉簡略だが例外も			葉簡本？
193孔明再上出師表	△	葉の方が詳しい部分も。後半は差が減る		46.21	
194諸葛亮二出祁山	×△	繁簡不定。後半やや差が減る	戰鬪		
195孔明遣計斬王雙	△	全體に細かい異同。繁簡不定	戰鬪	46.15	
196諸葛亮三出祁山	×	文の引用以外は大きく異なる			
197孔明智敗司馬懿	×	詔以外は大幅に異なる。敍述自體異なる部分も	戰鬪	37.79	
198仲達興兵寇漢中	△	前半葉は簡略			葉簡本？
199諸葛亮四出祁山	△×	最後の方が大きく異なる		37.69	
200孔明祁山布八陣	×	諸葛亮の手紙以外は大きく異なる。特に後半は全面的に違う	戰鬪		
201諸葛亮五出祁山	×	大きく異なる		31.26	
202木門道弩射張郃	×△	木門道はほとんど別文。その後は差が少なくなる	戰鬪		

203諸葛亮六出祁山	×	孫權の書簡を除き大きく異なる	戰闘	33.18	
204孔明造木牛流馬	×	木牛流馬の説明と書簡以外大きく異なる	戰闘		
205孔明火燒木柵寨	×	大きく異なり、同じ部分もあるという程度	戰闘	41.02	
206孔明秋夜祭北斗	△○	突然差が激減。ところどころ違う箇所がある程度			
207孔明秋風五丈原	△○	差のある部分が散在するが、引用が多い		40.99	
208死諸葛走生仲達	△	嘉がむしろ簡本的な部分も			
209武侯遣計斬魏延	△	あまり差がない		39.89	
210魏拆長安承露盤	△	あまり差がないが、葉は簡略			葉簡本？
211司馬懿破公孫淵	△	あまり差がないが繁簡不定		39.53	
212司馬懿謀殺曹爽	△	かなり差あり			
213司馬懿父子秉政	○	嘉が少し詳しいのを除けば大差なし		44.7	
214姜維大戰牛頭山	△	戰闘場面に少し差	戰闘		
215戰徐塘吳魏交兵	○×	戰闘場面のみ大きく異なる	戰闘	40.65	
216孫峻謀殺諸葛恪	△○	細かい異同あり			
以下葉なし					

かなり本文に異同があるもの、×は本文が大幅に異なり、ほとんど別の文章といってもよいものである。ただし、異同のレベル差の境目は、必ずしも則の切れ目とは一致しないため、前半と後半でレベルが異なるケースもある。二つの記號が記入されているのはそのような事例であり、前の記號が前半、後の記號が後半の異同レベルを示す。

もとより三段階の區分は主觀的なものであり、○と△、△と×の區別は必ずしも明確ではない。本來なら一致する字數と異なる字數をあげて、統計的に示すべきであろうが、一つには對象があまりにも膨大であること、また一つには、共通する字數が多くても敍述の仕方や文型が異なる場合が多く、その場合一致する字數の割合は必ずしも有效な指標にはなりえないのではないかと思われることから、そこまでの調査は行わなかった。ただ、「三國演義電子資料庫」には、二つのテキストがどの程度に一致しているかをパーセンテージで表示する「相似程度」という機能があり、一應の目安にはなると思われるので、その數字を表にあげておいた（毛本を基準に回數で表示されるため、嘉靖本の二則ご

とに一つの數字という形になっている）。ただし、「相似程度」は共通する順序で現れる單語を基準にしているため、基準となる語の位置が異なる場合、ほぼ同文でも全面的に異なるものとして處理されることがあるほか、脱文がある場合（前述の通り葉逢春本にはこの例が多い）には、パーセンテージは低くなる。また、一方のみに詩詞の插入や書簡などの引用がある場合には、當然のことながらやはりパーセンテージが低くなる。筆者の調査が基本的に插入の有無は度外視して、共通する部分の異同のレベルを問題としていることもあって、筆者の判斷と「相似程度」の數値が一致しない例が散見することになっているが、大まかには筆者の判斷と「相似程度」の數値は一致していることが見て取れるであろう。

では、調査結果を具體的に分析していこう。

まず一見して明らかなのは、前半と後半で大きな落差があることである。その境目は第140則前後、劉・關・張の死の少し前にあり、更に三人が死んでしまうとこの傾向は一層強まる。つまり、劉備・關羽・張飛が活躍する部分については、異同のレベルは比較的低いということになる。ただ、例外も存在する。更に細かく見てみよう。

まず第1則から第23則までについては、大きな異同は見られない。このことは「相似程度」の數値がすべて70以上、多くは80を超えることからも確認可能である。ところが第24則から第28則までの部分で異同が目立つようになり、「相似程度」も60代に落ち込む。それ以降はまた異同が減少するが、しかし最初の部分の水準にはもはやもどることなく、「相似程度」も80代は出ず、60代が散見されるようになる。異同が顯著な第79・80則を經て、赤壁の戰いとそれに續くくだりは、葉逢春本に脱落・脱葉が目立つためはっきりしたことはいえないものの、全體的には異同のレベルは低い。特にクライマックスとなる赤壁の戰いを描く第97・98則は異同が少なく、「相似程度」も80を超えていることが注目される。その後、第141則以下の漢中爭奪戰から關羽の死のあたりで異同が目立ちはじめ（「相似程度」も50を切る部分が出現）、以後は異同が多い方が常態となる。

ここまでで異同が目立つ部分を確認してみよう。まず第24～28則。この部分の異同はそれほど大きなものではないが、それ以前との落差の大きさを考えれば、輕視するわけにはいくまい。この部分は主として李傕・郭汜の兩將が獻帝を虐待することと、彼らが互いに爭うことを扱っている。ここでは獻帝の苦難などについてかなり執拗な描寫が見られるのだが、葉逢春本ではそれがかなり薄味のものになっているのである。また細部でも葉逢春本にはこなれない表現が多く、嘉靖本ではより自然な形になっている例が多い。一例をあげよう。第25則「李傕郭汜亂長安」の一節である。

（嘉）其妻曰、傕性莫測、今二雄不並立。倘酒後有毒、
（葉）　妻曰、傕性難測、今二雄不並立。倘酒食毒、

妾將奈何。汜未信。至晚聞府送物至。
妾將奈何。郭未信。晚聞　府送至食來。

葉逢春本に見える「酒食毒」の不自然さ（あるいは脱落があるのかもしれない）、「送至食來」の生硬さは明らかであろう。それらは嘉靖本ではより自然な表現に改められている。つまり、この部分については葉逢春本は質量ともに不十分であることになる。

なぜこのような現象が生じたのか。ここでこの部分の内容に注意すべきであろう。この部分は、曹操登場の導入の役割を負っているとはいえ、李傕・郭汜という全くの脇役と、要になる存在とはいいながら、物語上は影の薄い獻帝及びその后妃・大臣たちを主役とした、劉備・關羽・張飛・曹操といった主役たちの活躍する部分とは異なる、脇筋ともいうべき箇所なのである。三國志物語は、常識的に考えて劉・關・張が活躍する部分を中心に形成されたと考えるべきであろう。とすれば、この部分は話に起伏を付けるため後から入ってきた可能性が高いように思われる。

續く部分の中で違いが目立つのは、第78～80則である。ここは、劉表死後、荆州の人々が議論の末、曹操に降ることに決する部分と、劉備と諸葛亮が新野を燒いて曹操の軍を破るくだりである。單純化していえば、前者は議論、後

者は戰鬪を描く場面ということになる。實はここまでの諸則においても、異同は戰鬪の場面において認められる傾向があった。一般に、嘉靖本の方が人名・軍勢の人數などを詳しくあげ、後に述べるように、敍述も劇的な方向に向かう傾向がある。これは、戰鬪の敍述法が次第に進歩していったことのあらわれであろう。議論については、葉逢春本より嘉靖本の方が議論が多い傾向にある。これは葉逢春本が削減したか、嘉靖本が追加したか、兩方の可能性が考えられよう。

このように戰鬪や議論において差が出やすいというのは、全體にある程度共通して認められる傾向といってよい。ただ、第80則についていえば、異同が多くなる理由はもう一つある。この部分で語られている内容は、實は第78則「諸葛亮博望燒屯」の内容とよく似ている。「博望燒屯」は、雜劇の元刊本を今に殘していることからも明らかなように、古くから知られた物語である。だがその内容は、諸葛亮の指揮の下に劉備の軍勢が曹操配下の大軍を打ち破って終わるものであって、そのままでは劉備の逃走と長阪坡における趙雲の活躍には結び付けられない。實際、『三國志平話』では、諸葛亮が「此處不是當曹操之地」といってさっさと逃げ出すことになっている。とはいうものの、せっかく名軍師が出馬したばかりだというのに、ただ逃げ出すというのでは面白くない。そこで、退却にあたってもう一度戰鬪する必要が生じたのであろう。しかし同じようなシチュエーションである以上、その内容は前のくり返しに近いものにならざるをえなかった。劉備の軍が勝利しながら敗走していくという、考えてみれば矛盾した狀況も、ここから生じたものであろう。

以上の推定が正しいとすれば、このくだりは遲れて成立したことになる。この部分のみ異同が突出して多く認められるのは、發展途上にあるがゆえに文章が確定していなかったことに由來するのではなかろうか。

以上の二例は、成立が遲れるであろう部分には異同が多いという傾向があることを示している。常識的に考えて、早くに成立した部分ほど早く本文が固定するのが普通であろう。とすれば、逆に考えれば異同が多い部分は成立が遲

い可能性が高いことになる。

續く赤壁の戰い前後には異同が少ないことはすでに見た通りであるが、その後になると違いが目立ちはじめる。まず第109・110則だが、この部分は劉備が孫權の妹と結婚する物語を扱う。次に第115・116則、ここは馬超と曹操の戰いを扱う。更に第135則、ここは甘寧が曹操の陣營に夜討ちをかける「甘寧百騎劫曹營」の物語である。これらの部分も遅れて本文が成立したのであろうか。

第135則は、劉關張の物語を主筋とすれば、完全な脇筋にあたるものであり、後から入ってきた部分と考えるのが自然であろう。しかし、他の二つは『三國志平話』にも見える話であり、成立自體が遅れるとは考えにくい。とすれば、後になって手が加えられた可能性が高いことになる。

ここで興味深いのが『殘唐五代史演義傳』の存在である。同書の第47則は、後唐の後主の妹である石敬瑭の妻が兄のもとを脱出して夫のところに逃れることを扱うが、その本文は、題材を同じくする『成化説唱詞話』の「石郎駙馬傳」とも關係を持ちつつ、多くは『三國志演義』の劉備・孫夫人脱出のくだりを借用しているのである。[15] ではその本文は『三國志演義』のどのテキストと合致するのか。

（五代史）廖武曰、陛下雖有冲天之忿、臣料梁剛・伍亮
（嘉）　程普曰、主公空有冲天之怒、某料陳武・潘璋
（葉）　程普曰、主公雖有冲天之忿、某料陳武・潘璋

必追公主不來。……二人　隨後點一千馬軍趕來。却
必擒此人不得。……蔣欽・周泰隨後引一千馬軍赶來。却
必擒此人不來。……蔣欽・周泰隨後點一千馬軍來趕。却

説公主加鞭縱轡、催趲而行。……望見背後塵頭起處、衆
説玄德加鞭縱轡、趲程而行。……望見後面塵頭大起、人
説玄德加鞭縱轡、催趲而行。……望見背後塵頭起、衆

軍報道、
報、
軍報道、

この部分を比べただけでも、わずかな例外はあるものの、ほぼ葉逢春本と一致することは明らかであろう。つまり、『殘唐五代史演義傳』が參照したテキストは葉逢春本とほぼ同じ本文を持つものであったことになる。これは、葉逢春本の系統に屬する本文がかなり定着していたことを示すものであろう。とすれば、ここでも嘉靖本のテキストに手を入れた結果として葉逢春本が成立したとは考えにくい。やはり、葉逢春本系統のテキストに手を入れて嘉靖本系統が成立した可能性の方が高いと見るべきであろう。

そして、このように他の小說にも流用されるということは、この場面がある程度人氣のある箇所であったことを物語っていよう。事實、このくだりは『三國志演義』の中では數少ない女性の活躍する見せ場として、演劇などでもしばしば取り上げられることになる。江湖の世界を舞臺とする物語の常として、女性を重視しない傾向の強い『三國志演義』の中では、この場面はやや異質であり、想像をたくましくすれば女性と關わりの深い說唱藝能などの影響を受けているのかもしれない（事實、女性向けの藝能である彈詞『三國志玉璽傳』においては、劉備と孫夫人の物語は非常に大きな比重を占めている）。この部分に異同が多いのは、成立過程で多くの手が入ったことに由來する可能性が高かろう。

とすれば、馬超の物語についても同じことがいえるのかもしれない。ここもどちらかといえば脇筋に屬する部分であり、やはり獨自の展開を遂げた結果差が廣がった可能性が想定されよう。

第141則以降、異同は急激に增加しはじめる。第141～144則、つまり漢中爭奪戰の後半の部分と、第146～153則、つまり關羽の死に至るまでの戰いの部分は全體に異同が多い。こういう狀態になると、むしろ異同の少ない箇所がどこであるかが問題になってくる。第141～153則の中で異同が少ないのは、第144則後半の楊修處刑の場面と、第145則の劉備が漢中王となるくだり、そして第149則の關羽を華陀が治療するくだりということになる。このうち第145則は、半分以上が文言による文書の引用からなっており、楊修處刑の部分も『資治通鑑』『世說新語』などに見える逸話を集めたものである。つまりはいずれも大部分が文言の引用により構成

されているといってよい。これらの箇所は、文章の改良や物語の改變の對象とはなりえないであろう。殘る關羽治療のくだりは、『三國志演義』の中でも特に有名な場面であり、早い時期に本文が固定しつつあったものと考えられる。こうした例外を除けば、どうやらこれらの部分の本文の固定は、前半に比べると遲れるように思われる。

以後、基本的に差が大きい狀態が續くが、時に差が少ない回も散見される。ただそれらの多くは、文章の引用（160「漢中王成都稱帝」・182「孔明初上出師表」など）・文言的辯舌（170「曹丕五路下西川」・171「難張溫秦宓論天」など）・史書などの引用による逸話の集成（155「曹操殺神醫華陀」）といった、右の第141則以下の部分で見た原則にあてはまる場面が大半である。そして異同は後になるにつれて次第に大きくなり、あるいは葉逢春本が簡本化しているのでないかと思われる箇所もあるものの、諸葛亮と司馬懿の戰いのくだりになると一致しない部分の方が多くなる。ただ、諸葛亮の死の場面になると急に異同が減少することは興味深い。遺言のくだりなどにかなりの違いはあるものの、前後に比べれば差は格段に少ないといってよく（「相似程度」の數値が低いのは、嘉靖本にあって葉逢春本にはない詩文の引用が多いためである）、非常に差が大きかったその前のくだりとは鮮明な對照を示している。これも、やはり重要な箇所については異同が減少する傾向を示す事例といってよかろう。それ以降、葉逢春本が殘っている限りにおいては、異同のレベルが極端に高くなることはないものの、よく一致するわけでもないという狀態が續き、はっきりとした違いがあるのは戰鬪場面であるという傾向も相變わらず見て取れる。

四

以上の調査結果は、多くのことを物語ってくれるように思われる。まず異同の濃淡に顯著な偏りがあること。これは、成立過程を反映していると見るべきであろう。早い時期に完備した本文が成立した部分については、後のテキストが手を加える餘地は少ないが、不完全な本文しかなかった部分や、元來存在せず、後になって插入された部分については、テキストの固定度は低く、その結果テキスト間の

異同が大きくなるのではないか。

逆にいうと、このように部位によって大きな偏りがあることは、嘉靖本と葉逢春本に共通する祖本（一つとは限らない。というよりむしろ祖本の祖本といったものを想定すべきであろう）が、嘉靖本・葉逢春本以下のテキストとは大きく性格を異にしていた可能性を示唆するもののように思われる。實際、『列國志傳』『兩漢開國中興傳誌』といった明代後期に刊行された歴史小説が、いずれも元代後期に刊行された「全相平話」シリーズの本文としばしば文言まで一致し、直接的な影響關係を想定しうるのに對し、現存する『三國志演義』諸本の中においては、「全相平話」シリーズの一つである『三國志平話』との直接的關係を見出しうる箇所はほとんどないといってよい。[16] しかし、大まかな展開が一致し、登場人物のキャラクター等も共通すること、先に述べたように他の歴史小説には「平話」との直接的關係が見出されることから見て、『三國志演義』が『三國志平話』の影響を受けていないとは考えがたい。ではなぜ影響の痕跡を見出しえないのか。

その理由として考えうる最も單純な説明は、『三國志平話』と『三國志演義』の間にもう一段階を想定することであろう。卽ち、明代前期に『三國志平話』にかなり近い內容を持つ小説が存在し、それを改作する（これも一度とは限らない）ことによって現存する『三國志演義』諸本が成立したと假定するのである。こうした過程があったとすれば、第二段階もしくは第三段階の改作に當たって『三國志平話』の痕跡が消滅したとしても不思議はあるまい。實際、先にふれた『列國志傳』『兩漢開國中興傳誌』は、前者は『新列國志』『東周列國志』、後者は『西漢演義』（ただし、『西漢演義』は『兩漢開國中興傳誌』ではなく、その原型となったテキストに基づいているものと思われる）[17] という、より知識人向けの小説へと改作され、その結果「全相平話」の痕跡はほとんど消滅するに至っているのである。同じことが、はるかに早い時期に、『三國志演義』の成立に當たっても生じたのではないか。

この推定が正しいとすれば、嘉靖本と葉逢春本の共通の祖本、というより、『三國志平話』との距離を考えれば、

更にその祖本というべきものを想定した方がよいかもしれないが、それは「原演義」ともいうべき『三國志平話』と『三國志演義』の中間に位置するテキストだったことになる。その本文は、先に述べた文體の違いから考えて、嘉靖本よりは葉逢春本に近いものだったであろう。

『三國志平話』の内容と『三國志演義』本文の異同のありようがある程度の對應關係を示すことも、この假説を裏付ける一つの傍證となりえよう。前節で見たように、嘉靖本と葉逢春本の間に顯著な異同が認められる箇所は、前半においては劉備・關羽・張飛とは關わらない脇筋の部分に主として認められる。そして『三國志平話』は、もとより劉備・關羽・張飛を中心に置いているのであって、前節でふれた李傕・郭汜のことや、吳にまつわる物語はほとんど語られていない。更に後半になると、一部の話柄（南蠻討伐や姜維を降すくだり）を除いては詳しく語られることがない。[18] もとより、これもすでに述べたように、劉備と孫夫人の結婚や、馬超と曹操の戰い、更には南蠻討伐のくだりのように、『三國志平話』ですでに詳しく語られているにもかかわらず、テキスト間の異同が多い部分もあるが、これはおそらく、やはり前節で述べたように、これらの箇所がその後も展開し續けたことに由來するものであろう。

おそらく明代前期、それも比較的早い時期に『三國志平話』を下敷きにした三國志ものの小説が作られたのではないか。その内容は、當然『三國志平話』で扱われていた物語、具體的には劉備・關羽・張飛を中心に据え、かなり濃厚な江湖の雰圍氣を漂わせるものだったであろう。そして、後に生まれた『列國志傳』などの小説が三國志のパターンを踏襲して作られたものであるとすれば、『列國志傳』同様に、『三國志平話』の記述では不十分な歴史的枠組みや、劉備たちと直接關わらない群雄の動きに關しては、通俗的史書の文を流用して補ったのではないか。

そして次の段階では、『平話』に基づく部分から荒唐無稽な要素を取り除き、文章を整備するとともに、新たに補われた部分との間にある文體・内容の落差を調整する作業が行われる。具體的には、『平話』由來の部分をより文言的な整った文體に改め、史書由來の部分は逆により白話的

かつ平易な文體に改めるとともに、物語性を付與する作業が行われたのであろう。しかしこの落差は一度で埋めうるものではなかった。そこで、ある段階のテキストは部位により文體・内容に差が多いものとなる。葉逢春本は、その段階のテキストをある程度忠實に傳えているのであろう。そして、更に手が加えられ、ほぼ滿足すべき段階に達したのが嘉靖本段階のテキストなのではないか。

では、どのようなやり方で手が加えられたのか。その點は、これまで見てきた嘉靖本と葉逢春本の間に認められる相違のありようから見て取ることができるであろう。文體がより整備されたものに變わったことはもとよりであるが、他に顯著な差を示すのは、主として戰鬪場面である。史書などに基づく部分に、制作者である書坊が物語性を付與しようとして加えた戰鬪描寫は、所詮は型にはまった單調なものになりがちである。そうした事例は、たとえば『列國志傳』『全漢志傳』などにも顯著に認められる。それを、講釋風のより生彩に富んだものに作り替えることがなされたのではないか。一例をあげよう。嘉靖本第四十則「諸葛亮火燒新野」の一節である。

（嘉）却說曹仁等方纔脫得火厄、背後一聲喊起、趙雲引
（葉）且說曹仁　方才脫得火危、背後　趙雲
一軍趕來。混殺一陣、曹仁敗軍各逃性命、　誰肯回身廝
軍馬趕殺。　各軍自要逃命、那里肯回身廝
殺。　正奔走之閒、糜芳又引軍一枝、衝殺一陣。曹仁大
殺。　撞着糜芳　又殺一陣。
敗、　忽然喊起、又遇劉封引一彪軍、追殺一陣。敗軍奔
（葉本に該當の文なし）
到四更時分、人困馬乏奪路而走。
到四更左側、人困馬乏。

葉逢春本に劉封と戰うくだりがないことはともかくとし

て、それ以外の部分でも嘉靖本の方が全體に長いことは一見して明らかであろう。しかし、それが嘉靖本の本文を削った結果葉逢春本が成立したことを意味するものではないことは、一部葉逢春本の方が長いセンテンスもあることや、葉逢春本に見える「左側」という元代に頻用された古い語彙が、嘉靖本では「時分」という近代に至るまで用いられる語に變わっていることからも見て取れよう。つまり、すべてではないかもしれないが、ここでも基本的には葉逢春本のような本文を改變した結果として嘉靖本の本文が成立したのではないかと思われるのである。では、どのような改變が加えられたのか。

典型的なのは最初の部分に見える變化である。葉逢春本が「背後趙雲軍馬趕殺（後ろから趙雲の軍が追撃してきた）」と單純に述べるのに對し、嘉靖本は「背後一聲喊起、趙雲引一軍趕來（後ろでときの聲があがり、趙雲が一軍を率いて追いかけてきた）」とし、更に「混殺一陣（混戰して）」が加わる。つまり、正體不明の部隊が現れ、それは誰かといえば〜であったという言い回しを用いているのである。このように、突然ある武將や部隊があらわれたと記述した上で、氣を持たせておいてその正體を明かすというのは、葉逢春本と嘉靖本との異同において、後者のみに認められる事例が非常に多いパターンである。これは、聽衆の興味を喚起するという講釋のパターンに則ったものであろう。つまり、ここでは講釋のスタイルを再現する形で、より充實した記述へと改變されるというパターンにより書き換えがなされていることになる。

これが戰鬪場面において特に顯著に認められることは注目に値しよう。『秦併六國平話』などにおいては、戰鬪の場面では詳細はほとんど語られず、極めて單調な文がならび、『三國志平話』においても、クライマックスの戰鬪場面では詳しい描寫はなされない。これらは、おそらく講釋においては戰鬪場面は語り手が自身で脚色して語るのが常であり、種本に書かれるべき性格のものではなかったことに由來しよう。[19] 從って、戰鬪場面の詳しい描寫は、他の部分に比べて遲れて文字の形に定着したのではないかと推定される。そこでは、實際の講釋の口調を模倣する形で改善

が加えられたのであろう。とすれば、葉逢春本が生硬で單調な語り口を用いていることは、發展途上の狀態を示していることの現れと見なすことができよう。

他に異同が目立つ箇所としては、議論の部分があげられる。議論の部分は、讀者に知識人が參與するにつれて最も變化をこうむりやすい箇所である。元來大衆向けにこけおどしのペダンティズムを發揮していたであろう藝能レベルのテキストは、文字化が進展するにつれて次第により充實した文言的議論を增加させるようになるが、やがて高級知識人が讀者に參入すると、陳腐な議論として削減・省略されるに至る。先に述べたように、葉逢春本より嘉靖本の方が議論が多い傾向にある。これは、部位によっては葉逢春本が簡本的な省略を行った結果である可能性もあるが、全體的には、嘉靖本が文言的議論を充實させていく方向性を持つテキストであることを示すものであろう。そのため、議論において異同が多くなったに違いない。そして、嘉靖本と近い本文を持つ李卓吾評本に依據すると思われる毛本[20]においては、逆に議論は減少する。これは、高級知識人が讀者に加わったことの反映であろう。

五

このように、『三國志演義』は、小說としての體裁を整える過程で、讀者層の變化に對應しつつ變化していったものと思われる。葉逢春本と嘉靖本の異同の狀況から推定されるその變化の經過は次のようなものである。

まず、『三國志平話』をもとに、通俗史書の記述を加えて「原演義」が成立する。異同の少ない部分が劉・關・張に關わる箇所を中心とし、孫策・孫權を主とする場面には異同が多いことから見て、「原演義」はあくまで劉・關・張を中心に、曹操らが必要な範圍で登場するものであり、吳のことは劉備らに關わる範圍でしか現れなかったのであろう。また、後半になると異同が急速に增えることから考えて、劉・關・張死後に關する記述は簡單なものだったのではないかと思われる。つまり、單純化していえば、『三國志平話』に肉付けしたようなものだったのではないか。

次の段階では、「原演義」で語られていなかった部分が

補充されるとともに、「原演義」に存在した部分についても増補・充實が行われたのであろう。ここで主要部の文章はある程度固定する。この段階が葉逢春本のもとになったテキストなのではないか。

更に、補充部分の不完全な文章を手直しするとともに、主要部に部分的變更が加えられて、嘉靖本の本文が生まれる。これがいわば第三段階である。建陽では第二段階のテキストが殘り（たとえば余象斗本）、またそれに依據する簡本も作られる（たとえば黄正甫本。ただし嘉靖本系統からの影響も受けているかもしれない）が、その他ではこの第三段階のテキストが廣まり、一應固定することになる。

こうして充實したテキストが成立したことは、讀者層を高級知識人にまで廣げる結果をもたらした。その結果、知識人の好みにも合うテキストが要求されることになる。こうして生まれたのが毛本であり、これがいわば第四段階ということになる。

以上、一應の推定される變化を示してみた。もとより推測に過ぎない議論ではあるが、大筋は白話歷史小說展開の道筋に合致したものといってよい。また、前半と後半との間に明らかな落差が認められることなどは、上田望氏が行った語彙に關する分析とも一致するところである。この推論に裏付けを與えるためには、更なる內容・語彙などの檢討が必要であろうが、それは今後の課題としたい。

註

① ただし、近年語彙の分布などを通して成立過程を考えた上田望「『三國演義』の言葉と文體――中國古典小說への計量的アプローチ」（『金澤大學文學部論集　言語・文學篇』第二十五號〔二〇〇五年三月〕）のような研究が現れつつある。

② 『三國志演義』版本の研究』における葉逢春本を扱った第三章第二節「『新刊通俗演義三國志史傳』について」などにおいて、すでに花關索說話の有無が決定的なものではないことは認識されているように思われる。建陽系統のテキストの中においては、「花關索系」「關索系」の區分を設けることが一定の有效性を持つことはいうまでもない。

③ 嘉靖本の本文は『明弘治版三國志通俗演義』（新文豐出版社一九七九）、葉逢春本の本文は井上泰山編『三國志通俗演義史傳（上）（下）』（關西大學出版部一九九七）による。な

お、葉逢春本の詳細については、同書の解説、並びに陳翔華「西班牙藏葉逢春刊本三國志史傳瑣談」（『西班牙藏葉逢春刊本三國志史傳（上）』〔『三國志演義古版叢刊續輯（一）』全國圖書館文獻縮微複制中心二〇〇四〕）參照。

④ 鄭振鐸「三國志演義的演化」（『小説月報』二十卷十期〔一九二九年〕、ここでは『中國文學研究』〔古文書局一九六一〕所收のものによる）以來多くの論文がこの説に從う。

⑤ この點については、拙論「『金瓶梅』成立と流布の背景」（『和漢語文研究』創刊號〔二〇〇三年十一月〕）參照。

⑥ 葉盛『水東日記』卷二十一。拙著『中國歷史小説研究』（汲古書院二〇〇一）第四章・第六章參照。

⑦ この點については、鄭振鐸前掲論文以來多くの論文で指摘されている。

⑧ 楊緒容「葉逢春本『三國志傳』題名『漢譜』説」（『明清小説研究』第六十四輯〔二〇〇二年二月〕）。

⑨ 余象斗本などの建陽系諸本の方が古形を傳えているのではないかという推測は、柳存仁「羅貫中講史小説之眞僞性質」（『和風堂讀書記』〔香港龍門書店一九七七〕）でふれられて以來、周兆新「舊本三國演義考」（『三國演義考評』〔北京大學出版社一九九〇〕）、金文京「『三國演義』版本試探――建安諸本を中心に――」（『集刊東洋學』第六十一號〔一九八九年五月〕）、上田望「『三國志演義』版本試論――通俗小説の流傳に關する一考察――」（『東洋文化』第七十一號〔一九九〇年十二月〕）など、多くの論文で述べられているところであり、葉逢春本についても③に引いた井上・陳兩氏の論でその可能性が指摘されている。

⑩ 中川諭『『三國志演義』版本の研究』（汲古書院一九九八）第二章第三節「毛宗崗本の成立過程」。

⑪ 太田辰夫『中國語歷史文法』（江南書院一九五八）一六・七・一「使役」、佐藤晴彦「《清平山堂話本》《熊龍峯小説》と『三言』――馮夢龍の言語的特徴を探る――」（『神戸外大論叢』第三十七卷第四號）。

⑫ ③・⑨所引の周・金・上田・井上・陳諸氏の論文。

⑬ こうした脱落のパターンについては、魏安『三國演義版本考』（上海古籍出版社一九九六）に詳しい。なお、葉逢春本に脱落があることについては、③・⑨所引の諸論考などですでに言及されている。

⑭ 田中謙二「元典章文書の研究」第一章「元典章における直譯體の文章」（『田中謙二著作集』第二卷〔汲古書院二〇〇〇〕。「元典章における蒙文直譯體の文章」〔『東方學報』三十二（一九六二年）〕を改稿したもの）六。

⑮ 拙著『中國歷史小説研究』（汲古書院二〇〇一）第七章。

⑯ この點については、①所引の上田論文で指摘されている。

⑰ ⑮所引の拙著第二章參照。『西漢演義』が依據したものが何であるかは確定しがたい。

⑱ ①所引の上田論文は、語彙の面からこの問題を考察し、類

似した結論に達している。また、同論文では、前半と後半で文體が變化し、後半は文言的になることが指摘されているが、この點も本論の內容と符合する。

⑲ 拙著『「現實」の浮上――「せりふ」と「描寫」の中國文學史』（汲古書院二〇〇七）第六章の「小說の誕生――全相平話」の項參照。

⑳ ⑩參照。